

01 卒業設計

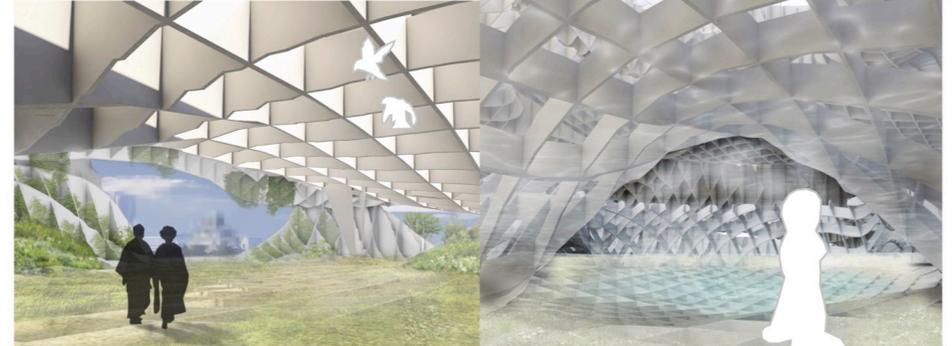
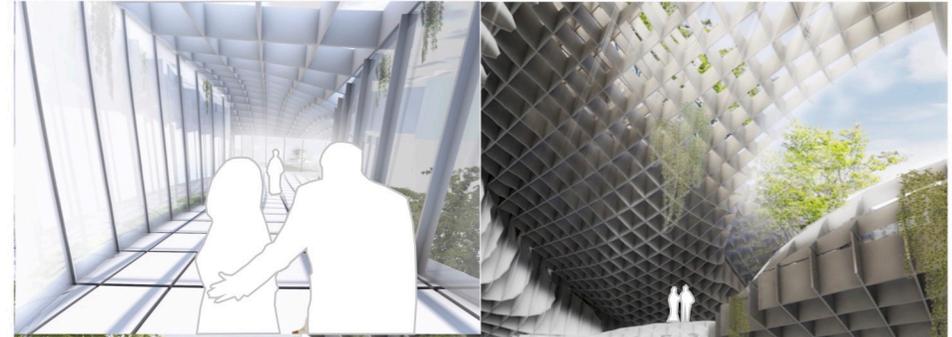
開講年次：学部4回生後期

神戸大学建築卒業設計賞 大賞

祝祭の杜

森下孝平（遠藤研究室）

日本人にとって杜は地域コミュニティの中心であり、豊かさの象徴であるとともに、畏れ敬うことで信仰の対象とした神聖な場でもあった。
 掘り所であった杜を感じる空間は現在の都市に見ることはない。
 都市に対してその雰囲気や溢れ出させる結婚式場として杜を創出する。



海境より

神戸大学建築卒業設計賞 木南賞

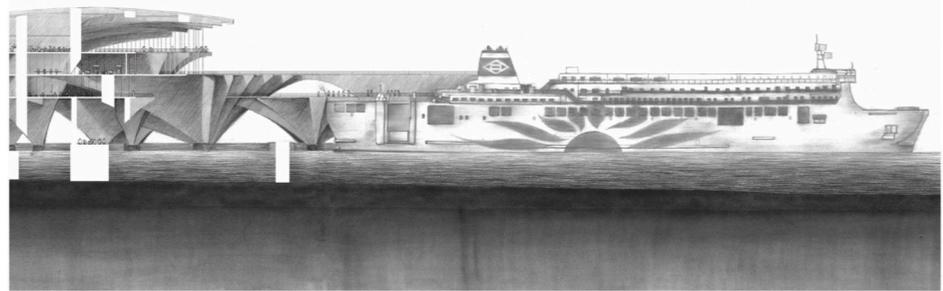
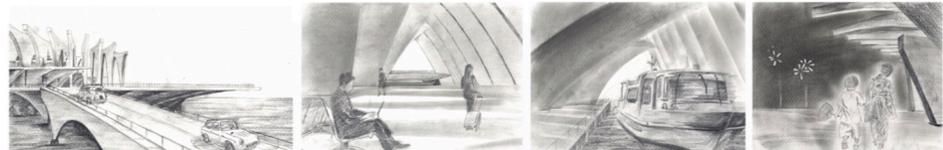
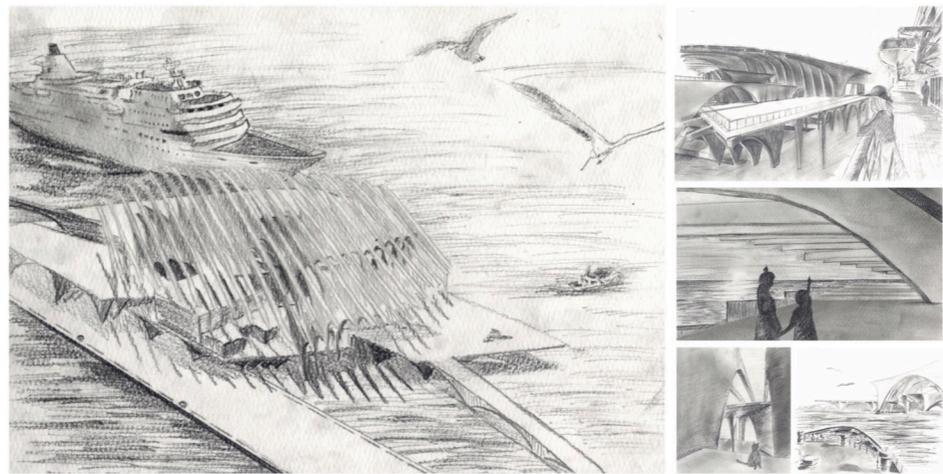
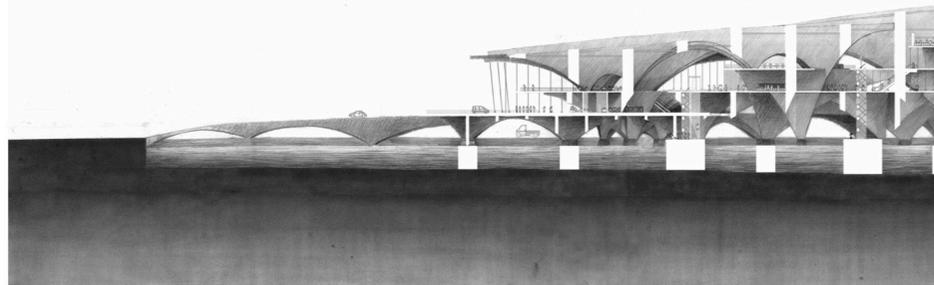
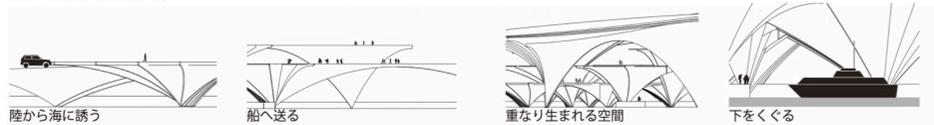
崔秋韵 (遠藤研究室)

海に囲まれた日本には見える国境は存在しない。異民族、異文化が隣り合う場所はとても希少な場所ではないか。境界線上の空間、国際客船ターミナルを神戸に提案する。海上空間にアーチ構造を連続させ、重ね合わせる。奥へ行くほど重複し、本来空間を切り離すアーチがここでは境界面を生み出し、航海へ旅立つ人たちのターミナルとして存在する。

◆Diagram



◆アーチから生まれる空間



Media is Art.

小川亜希穂（槻橋研究室）

メディアの発達は、生活に豊かさを与える一方で、私たちは便利で従順な「仲立ち」に頼りきってしまい、その膨大さゆえに新たな衝突を生みだしている。
メディアとともに能動的に行動することを目指し、受信と同時に発信する特徴を持つメディアアートを通して、世界と個人をつなぐ施設を計画する。異なる要素を持ったチューブ同士がぶつかり、生き物のように変容する空間とともに、受動的なものから能動的に変化するプログラムを通じて、他者との出会いとコミュニケーションを創出する。



神戸大学建築卒業設計賞 優秀賞

橋場空間

—神戸の港を繋ぐ場としての橋の提案—

森川潤（三輪研究室）

橋とは本来移動のための空間であり、そこを通ると景色が連続的に展開される。そこに場所的な要素を付加することで、神戸の場所性を生かした様々な滞留を起こすことを考える。港の移り変わりを感じさせる場としての橋の提案。



神戸大学建築卒業設計賞 優秀賞

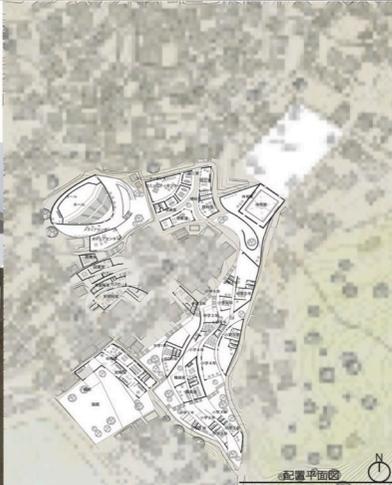
2014 年度卒業設計発表会

1.87 km²のものがたり

—瀬戸内の離島・坊勢における子育て空間—

岡田朋大 (山崎研究室)

独自の子育てでコミュニティにより、近年まで人口が増加していたという特徴を持つ、瀬戸内の離島・坊勢に子育てでコミュニティ拠点を提案する。幼稚園、小学校、中学校とコミュニティ施設がそれぞれ絡まりあうプログラムを、坊勢島の集落の形態を活かしつつ、集落の隙間である斜面地に計画する。
この計画は、坊勢島の子育てコミュニティ拠点となるとともに、集落にさらなる広がりを与える。子供たちは、この小さな島をこの拠点を中心に駆け回る。



審査講評

三輪康一
神戸大学大学院教授 審査委員長



2014 年度の建築卒業設計賞の審査は、神大会館六甲ホールで、卒業設計発表会に引き続き、一次投票とその後の選考会をもって実施されました。

本年度の卒業設計発表会発表は 33 作品で、発表会での質疑応答の後、まず、審査員による一次投票の結果、賞選考対象作品として 10 作品が選出されました。この段階で惜しくも選にもれた作品のなかでは、合田宏明さんの「dock on the dock ードックを利用した立体型マリーナー」、澤江隆志さんの「まちの解体、そして未来。」が惜敗でしたが、いずれも、空間としての、あるいは計画論としての主張があと一歩弱かったのが残念です。

一次投票通過の 10 作品については、建築単体の造形面での可能性を追求し、まちを成立させる空間構成にコミットし地域空間の持続的な改善を企図したものなど、いずれも個性的な作品たちでした。選考会ではこれらの選考対象作品についての補足説明と質疑応答の後二次投票を行い、上位 4 作品に追加投票により 1 作品を加えて上位 5 作品を受賞候補対象作品としました。これら 5 作品について再度の質疑応答の後、三次投票が行われ、下位となった、岡田朋大さんの「1.87km²のものがたり—瀬戸内の離島・坊勢島における子育て空間—」と森川潤さんの「橋場空間—神戸の港を繋ぐ場としての橋の提案—」が優秀賞候補に決定。岡田さんは斜面地での地形と建築のきめ細かな関係を問い、森川さんは突堤をつなぐ橋を都市的スケールで建築化した。両者は好対照な作品でした。残る 3 作品について四次、五次投票を行い、票数は拮抗しましたが、小川亜希穂さんの「Media is Art」が 3 つ目の優秀賞候補に。小川さんの作品はよじれた 5 つのチューブが組み合う造形力が高く評価されたが、よじれる形態の必然性をプログラムとの関係でより説得力をもって示すことができなかったことが惜しまれます。

最後まで残った 2 作品について、最終投票は審査員の挙手で行われ、またしても拮抗しましたが、森下孝平さんの「祝祭の杜」が大賞候補に、

崔秋韵さんの「海境より」が木南賞候補に選ばれました。森下さんの作品は螺旋上にみちを凝縮して予想もつかない空間をつくりだし、崔さんの作品はアーチを重ね合わせて古代ローマ的なスケールの空間をつくりだした。両作品はともに、卓越した造形力とその環境のなかで、私が、わたしが、と主張するモニュメントとなりえています。あえていえば、森下さんの螺旋はプランニング上の妥当性が問われ、崔さんのアーチは旅を誘う空間としてはやや重苦しい印象であったかもしれません。

ところで、今回もまた、選考会での、非常勤講師の先生方を含む選考委員の作品批評と相互のディスカッションは、今、建築を考える上で貴重で示唆に富むものでした。とくに、社会的背景のなかで、その場に建築が存在できること、その妥当性についての論点は、自らが、場とプログラムを設定し、空間化する卒業設計という作業にとって重要な意味をもつといえます。卒業設計をめざす学生諸君がこうした議論の場に参加することの大切さを感じます。



会場：神戸大学百年記念館六甲ホール

審査委員

三輪教授を審査委員長とし、選考会選考委員は計画系の全教授 6 名 (遠藤、黒田、末包、北後、三輪、山崎)、准教授 4 名 (大西、近藤、梶橋、中江)、寄附講座客員教授 1 名 (團紀彦氏)・特命准教授 1 名 (福岡) および当日全作品の発表を見て頂いた多賀教授・鈴木准教授の 2 名、ならびに選考会参加を受諾いただいた非常勤講師 10 名 (設計系演習担当: 島田陽、山隈直人、李映一、竹口健太郎、大谷弘明、近井務、城戸崎和佐、長濱伸貴の各氏、大学院学内インターンシップ担当: 戸澤竜一、岩田章吾の各氏) の計 24 名とした。なお、当日全作品の発表を見て頂いた鈴木准教授は、一次投票を行い、選考会は欠席であったため、選考会での審査員は計 23 名とした。

得票数一覧

氏名	卒業研究 題目	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	7回目	決戦	最終結果
森下 孝平	祝祭の杜	11				6	10		13	大賞
崔 秋韵	海境より	7				6	7	12	9	木南賞
小川 亜希穂	Media is Art.	8				6	6	11		優秀賞
森川 潤	橋場空間 —神戸の港を繋ぐ場としての橋の提案—	7				4				優秀賞
岡田 朋大	1.87km ² のものがたり —瀬戸内の離島・坊勢島における子育て空間—	4	7	8	13	1				優秀賞
中川 絵理香	写真と時間の美術館	3	8	8	10					佳作
鎌田 悠也	光と行為のうつろいゆく建築	4	6	7						佳作
田中 健人	表出のまほろば	2	2							佳作
伊藤 美芽	オモテとウラの編み込みまち —商店街と寺・神社の新たな関係性の構築—									佳作
小松 昌平	島の駅 —堤外地において人と車が生み出す賑わいの場—									佳作

神戸大学建築卒業設計賞 佳作

写真と時間の美術館

中川絵理香（槻橋研究室）

旧JRR福知山線生瀬～武田尾間の廃線跡地。歩くことによって歪められた時間は引き伸ばされた。その引き伸ばされた時間の中でストーリーは展開する。この廃線跡には人々が写真を撮りに来る。写真を撮る瞬間、シャッターを押す瞬間から光は閉じ込められる。そんなほんのわずかな時間の中で空間に着目した。光と影が映りこみ、自然と対応して微妙に移り変わっていく空間でわたしたちは時間を感じる。



光と行為のうつろいゆく建築

鎌田悠也（鈴木研究室）

6種類の自然光の導入手法を設定する。あるアクティビティに対して、どんな自然光の導入手法が適切か、光と行為を関連づける。このような空間作りをすることで、施設を利用する人々が自分に必要な光を求めて能動的に建築内部を回遊することを誘発する。光の入る時刻とその期間は毎日少しずつ変わってゆくと、高密度の都市においても、太陽の動きや自然のうつろいを感じながら日常生活を営むことができる。



表出のまほろば

田中健人（遠藤研究室）

時代・技術の進歩とともに都市においてのわたしたちの生活は便利になってきた。しかしその過程で、わたしたちは人と人との関わり合い、人間つばさの表出する場を失いつつあるのではないかと転換期を迎える今、人と人、人と建築の関係について考える。これは再開発でも懐古主義でもない未来への物語。100年後のわたしたちへ。



midorinosekai—ブラウンフィールド再生計画—

伊藤美冴（槻橋研究室）

かつては寺内町として栄え、講のまちから発展してきた大阪府八尾市の商店街。商店たちは寺や神社に揃って背を向け隣の如く立ち並び、商店街（オモテ）と寺・神社（ウラ）に二分化された空間が生まれた。しかしこの二極空間はまちの歴史を分断し寂れた空間を作り出す元凶なのではないか。商店街の持つ強軸に周りの空気を少しずつ吸い込ませ編み込むことで、オモテとウラが寄り添い合う商店街空間を提案する。



島の駅—堤外地において人と車が生み出す賑わいの場—

小松昌平（槻橋研究室）

緑の真珠大島に島民の居場所となり、人々を暖かく迎え入れるような、島の駅を計画する島の玄関口として、人々を迎え入れてきた浦の浜は、東日本大震災、またこれから進められる防潮堤建設、本土との架橋完成などにより、大きく環境が変わり、その玄関性が失われつつある。防潮堤と海の間で島の駅は、自動車を引き込み、島と海、島外と島内を繋ぐ。交流の場であった浦の浜は形を変えて存在し続ける。



2014 年度卒業設計発表会

作品講評

大賞

祝祭の杜



森下孝平（遠藤研究室）

大阪城公園北端の敷地選定がまず秀逸。川と堀との間の細長いスペースに結婚式などの祝祭に利用できる立体的パブリックスペースを提案している。鋼鉄のクロスメッシュ樹状構造を三重螺旋のスロープで昇っていく。メッシュ部分の深さを活かして高木を多数植え込み年月の経過が建物らしさを徐々に覆い隠していく。摩訶不思議な内部の大空間が見所となっていて、おそらくこれまで体験したことのない場所が創出されている。大型模型をこのかみ合わせ工法で完成させるには形状が複雑でありすぎたか。BIMの活用が巧者がその持てる能力を全開にして取り組んだ。森下君の青春時代の一大会展となった。

審査委員 大谷弘明

木南賞

海境より



崔秋韵（遠藤研究室）

反復される「アーチ」の群が、海辺に様々な表情をみせるプロジェクト。埠頭ターミナルの設計としては、シンボル性の強い造形によってランドマークとしての魅力を追求する方法もあり得ただろうが、「海境より」の作者はより現代的ともいえる方法を選んだ。それはレベル差や動線の処理といった身体スケールの緻密な設計、量感のある船の背景となりながらこれに負けない造形、そして海辺全体を遠景から見たときのシルエットといった、小さなスケールから大きなスケールにわたって輻輳する様々な要求に、「アーチ」を単位とし必要に応じて立体的に反復することで、見事にこたえてみせた。時間をかけて丁寧に空間モデルを追求したものにのみ到達しうる建築であり、ヴェネツィアのアルセナーレにリニューアルされたアーチ型埠頭を思いおこさせながら、ユニークでもある。これから同様の姿勢で彼女が現実の建築に取り組んでいくことを期待したい。

審査委員 竹口健太郎

2014 年度卒業設計発表会

作品講評

優秀賞

Media is Art.



小川亜希穂（槻橋研究室）

空間のダイナミズムは断面図にあらわれる、と常々思っている。その意味において、小川さんの作品は、今年の卒業制作のなかで最も断面の効果を考えていた。チューブ状の空間は、進行方向（長手断面）に沿って高さに変化しながら、捻り、交錯することで、視野方向（短手断面）にも変化をもたらす。さらに断面図のベースとなる地盤面が、建築との空隙によって、アクティビティを誘発する魅力的な場所となっている。図面も模型も迫力があつたが、つくりだした空間を表現しきれなかったことが惜まれる。

審査委員 城戸崎和佐

優秀賞

橋場空間 ー神戸の港を繋ぐ場としての橋の提案ー



森川潤（三輪研究室）

この計画は神戸港の幾つかのポイントを橋梁で繋ぎながら複合化した橋そのものを「橋場空間」として神戸港の活性化の拠点にしようとするものである。現在の神戸港の文脈を良く考えており、さらなる発展の余地を建築化した橋に担わせるという問題の設定にも説得力があつて力強い作品だと感じた。卒業設計のテーマの設定はあくまで出発点であつて到達点ではない。こうした重厚で社会的に説得力のある出発点を持つているだけにより軽快で新しい造形性が加われば更に高い評価を得る作品になったと思う。

審査委員 團紀彦

優秀賞

87km²のものがたり ー瀬戸内の離島・坊勢島における子育て空間ー



岡田朋大（山崎研究室）

今回、卒業制作の評価において<エッジ>やく境界>、<輪郭>のデザインに注目しながらすべての作品を観てみた。それによりこの作品を含めていくつかの作品において構造的かつ空間的な特異性を発見することが出来た。この作品は、「集落的なプラン」として丁寧に地形などの空間文脈を読み取り、それを建築化した空間の曖昧性や多様性が大きな特徴である。しかし、建築そのものに関してはもう少し洗練さを高めることが望ましい。

審査委員 李暎一